



第1回放課後子ども教室研修会

目的：放課後子ども教室推進事業の先進的な実施状況を見学したり、成果や現状について協議したりするなど、実践を学ぶための研修会を行い、事業に携わるコーディネーターやボランティア人材の資質の向上を図る。

実施日：平成30年8月7日（金） **場所：**福島市吾妻学習センター **参加者：**76名

講話及び演習 「子どものほめ方、叱り方～感情トレーニング～」

桜の聖母短期大学生涯学習センター講師 岡田友子 氏

1 “褒める・叱る” ことの誤解

- 褒めることは、甘やかしたり、おだてたりすることではない。過保護や過干渉は、子どもたちを指示待ち人間にしてしまう恐れがある。
- 「叱る」と「怒る」は違う。叱っているのは、本当に子どものためか？本当に躰のためか？自分の保身のためではないか？誰のために叱って、その結果どうしたいのかをしっかりとつことが大切である。



2 褒めることの意味とテクニック

- 褒めることは、子どもたちに勇気と自信を与え、やる気を促すことである。やる気は内発的な知的好奇心であり、自発的な行動の要因となっていく。
- モノやお金で釣ったり、親の望む方向に操作したり、結果だけで判断したり、他者と比較したりする褒め方はよくない。
- 褒めるコツは、「素直に」「タイミングを外さず」「プロセスを認めて」「具体的に」褒めることである。子どもの資質や多様性を認め、感謝や労いを言葉や態度で伝えていくことで、自己肯定感や豊かな感受性が育まれていく。

3 叱ることの意味とテクニック

- 「叱る」ということは、子どもの成長を促すために行う行為である。強制や命令ではなく、改善や成長のための気づきを与えることである。「こうなってほしいから叱る」という目的を明確にして、「お母さんは悲しいなあ」等、自分の気持ちを添えると効果がある。
- 機嫌によって叱ったり、人格攻撃をしたり、人前で叱ったり、感情をぶつかけたりしてはいけない。

○ 上手な叱り方

<基準>

- ・ 叱るときの基準（ルール）が明確であること。
- ・ 叱るときの基準の納得性が高いこと。
（相手に決めさせるとなおよい。）

<リクエスト>

- ・ リクエストが具体的で明確であること。
- ・ リクエストに応じる行動の評価が明確にできること。



<表現>

- ・ 穏当な表現、態度、言葉遣いであること。
- ・ 相手を責めないこと。

4 褒めことばと励ましことば

- ① 行動や結果を褒める。
- ② 個性や性格を褒める。
- ③ 取り組みや姿勢を褒める。
- ④ 励ましの姿勢で声かけをする。



褒め上手になるポイント

- ① 子どもを操作する意識をもたず、認める気持ちをもつ。
- ② できて当たり前の評価ではなく、「いいと思う」事実を本音で褒める。
- ③ ボディランゲージを使って、表情や態度を交えて褒める。
- ④ 子どもの性格や姿勢等、様々な視点を考慮して、ポジティブに柔軟に褒める。



叱り上手になるポイント

- ① 子どもに学ぶチャンスを与える。
- ② 自分の保身でなく、子どもの成長を信じ愛情をもつ。
- ③ 一言添え、子どもに考えを言える機会を与える。
- ④ 改善点を具体的に伝える。
- ⑤ 肯定的で前向きな言葉を遣う。
- ⑥ 事実と憶測を聞き分ける、見分ける。
- ⑦ 何のために叱るのか基準や目的、リクエストを伝える。
- ⑧ 叱った後のフォローをI（アイ）メッセージで行う。



情報交換「放課後子ども教室等の成果や課題」

子どもの放課後支援に関わっている参加者が、情報交換を行った。本研修会に係る、子どもとのかかわり方や、普段携わっている教室やクラブ等の運営方法と特徴について情報交換が行われた。アンケートの感想欄には、「各市町村によって、さまざまな状況があるので、その取り組みや課題を聞くことができてよかった。」などの声が数多く記載されていた。



【参加者からの声】

- ・「愛情をもって叱る」を放課後子ども教室でも実践していこうと思います。発達障がい児童を支援していますが、いろいろなことが起きます。褒めながら乗り越えていこうと思いました。
- ・「何度も言うけど」や「どうしてやったのか理由を教えて」などは、叱るときにこれまでも言ってきた言葉だったので、改めて、大切なポイントとして確認できて良かったです。また、叱るときには子どもとの距離がありすぎると、効果が無いことを初めて知りました。これは、すぐに実践できることだと思いました。これからは、年齢に応じた対応の仕方も学べたらと思います。